

## 在宅看護論実習における学生の学びの一考察

長田 司<sup>1)</sup> 菊地 珠緒<sup>1)</sup> 橘 達枝<sup>1)</sup>

### 要 旨

在宅看護論実習で、看護師に同行訪問した事例において学生が着目する対象や看護の関わりの場面と学びを明らかにし、本学の実習目的・目標と照らし合わせながら、考察した。在宅看護論実習を終了した学生8名に、半構成的面接を実施した。

その結果、学生全員が2度同行訪問をし、アセスメント、看護計画立案までした対象の場面上げた。学生は【様々な療養者・家族に気づく】【見ることで今まで感じなかった疑問を抱く】【看護師の技術・関わりを通して学ぶ】ことを行っていた。これらを基本に実習での学びを深めていることが示唆された。半構成的面接により学生が着目する対象や看護の関わりの場面と学びをレポートや記録だけではなく、言語化し、明らかにした。

キーワード：在宅看護論実習、学生、学び、気づき、疑問

### I. はじめに

在宅看護論実習を通して、学生が在宅看護の特徴やその対象である療養者と家族について理解を深め、看護の役割について学びを深めていけるかは、在宅看護を担当する教員の重要な課題である。1996年に看護基礎教育カリキュラムに在宅看護論が導入されて、16年が経過した。在宅看護論実習の主力は、訪問看護ステーションでの実習となる。そこでは学生が単独で訪問を行うことはなく、看護師に同行して看護実践の場に参加して対象や看護の関わりを観察したり、一部を援助するというのが一般的である。

それを踏まえて在宅看護論実習に関する研究では、QOLを考慮した記録用紙の工夫などによる学習効果の報告<sup>1)</sup>、複数の療養者宅を訪問する実習と1事例の療養者を受け持ち、援助を考える実習の学習効果<sup>2)</sup>などが報告されている。また、これまでに実習記録やレポートの分析により、学生が学んだ内容についての研究も多い<sup>3) 4) 5)</sup>。しかし、学生が着目する対象や看護の関わりの場面と学びを明らかにするという視点から半構成的面接を行った研究は見当たらなかった。そこで、本研究では、個々の学生の学びに着目し、明らかにする。在宅看護論実習の中で看護師に同行訪問した事例を通して何を

感じ取っていたのかを報告していきたい。

### II. 研究目的

在宅看護論実習の訪問事例の中で、学生が着目する対象や看護の関わりの場面と学びを明らかにする。その上で本学の在宅看護論実習の目的・目標に照らし合わせてどのように学んでいるのかを考察し、明らかにする。

<在宅看護論実習の概要>

#### 1. 実習目的

様々な健康上の問題や課題を持って地域で生活する人々とその家族について理解し、在宅看護を実践するための基礎的能力を養う。

#### 2. 実習目標

- 1) 地域で生活する療養者とその家族が持つ健康上の問題や課題と生活との関連を理解し、必要な支援を考えることができる。
- 2) 地域で生活する様々な健康の段階にある人々とその家族に対する看護の役割と特徴を理解する。
- 3) 健康上の問題や課題を持って生活する人々を支える社会資源や保健医療福祉の役割・機能を理解する。

#### 3. 在宅看護論実習の内容

1 グループは12人ずつで、1訪問看護

1) 川崎市立看護短期大学

ステーションに2名ずつ、6ヶ所の施設を使って実習する。7クールの実習で計84名が実習となる。

また1クールは12日間で構成(表1)されており、保健所3日間、福祉事務所1日間、訪問看護ステーション6日間、学内中間・最終カンファレンス2日間である。訪問看護ステーションでの実習は看護師に同行して、対象者と看護の関わりの場面に参加する。2週にわたり、1名を受け持ち

事例として初回訪問とカルテから情報収集、アセスメント、看護計画立案を行い、看護師に同行して再度訪問し、看護の場面に参加する。計画の一部が出来るところを手伝いながら観察を通して評価する。その他に複数の療養者宅の同行訪問をし、同様に看護の場面に参加し、一部が出来るところを手伝いながら訪問看護について理解していく。

表1 実習計画

	第1週	第2週	第3週
月	↑ 保健所実習	中間カンファレンス・個別指導	福祉事務所実習
火	↓	↑ 訪問看護実習	最終カンファレンス・個別指導
水	↓		
木	↑ 訪問看護実習	↓	
金	↓		

### Ⅲ. 研究方法

1. 対象 平成21年度前期に在宅看護論実習を行った3年生 8名

選定方法は、4月の全体オリエンテーションで3年生全員に研究についての説明と協力の依頼をした。学生に研究者の面接日を提示し、公募したところ、8名の参加希望者があった。予定では6名であったが、参加希望者全員に対して研究の依頼をし、承諾を得た。

2. 調査期間 平成21年7月

3. 調査方法・調査内容

調査方法は、学生に調査の目的や方法を説明し、同意を得られたものに調査票の記入後、インタビューガイドに基づいた半構成的面接を実施した。調査は、家庭看護実習室の一角で外部からの接触をなくし、圧迫感のない、ゆとりあるスペースで行った。面接は、共同研究者と二人で1人20～40分程度であった。

調査内容は、「実習を受ける前」の学生の背景、「実習を通して学んだこと」の学びとなった対象や場面、着目した理由、看護師の看護実践、自分の思い・感じたこと、学んだことである。

4. 分析方法 以下の手順に従って分析を行った。

面接内容の録音記録から逐語録を作成した。データ分析は、在宅看護論実習から学生が実習を通して学んだことに焦点を当てて、要約的内容分析<sup>6)</sup>を参考に行った。

学生の言葉に留意しながら、学びに関連のある文脈を取りだし整理し、内容を抽出した。次に文脈ごとの意味を何度も読み返し、抽象度を上げてサブカテゴリーを作成した。さらにサブカテゴリーの相違性及び類似性に注意しながら分類、整理し、カテゴリーを作成した。分析作業は研究者間で同意が得られるまで繰り返し、データ分析の信頼性の確保に努めた。

その内容が本学の実習の目的・目標に沿って学べているか、考察を行った。

5. 倫理的配慮

実習終了時において、文書と口頭で研究の趣旨を学生に説明し、同意を得た。

また、その際、研究への協力は自由意志であり、参加拒否の権利、途中棄権の権利もあることを文書と口頭で説明した。謝礼として図書券を提供した。また、成績とは一切関係のないことと、逐語録の内容確認を本人に依頼し、分析および公表の了解を得る。個人が特定されないように匿名化に配慮した。

本研究は川崎市立看護短期大学研究倫理審査委員会設立移行期のため、調査が先行したが、審査を受け、平成24年12月5日付で承認を得た。

#### IV. 結果

##### 1. 学生の背景

対象となった学生は8名で、年齢は20歳代6名、

30歳代2名である。男性は1名で20歳代であった。

##### 2. 学びとなった療養者の状況及び場面(表2)

全員の学生が学びを深めた1場面として取り上げたのが、実習期間中2度訪問をした受け持ち事例であった。初回訪問とアセスメント、看護計画立案後、再訪問を行った。学びとなった療養者の状況及び場面を表2に示す。

表2 学びとなった療養者・介護者の状況及び場面

学生	学びとなった療養者の状況	療養者の性別	介護者の有無	場面	
A	高齢・寝たきり	女性	有・娘2人	介護者ががんがわかって看護師に相談している	受け持ち事例
B	難病・ターミナル・嚥下障害	男性	有・妻	看護師が口腔ケア、吸引を行っている	受け持ち事例
C	低栄養状態	女性	有・夫	看護師が療養者や家族に胃ろうがどのようなものか説明している	受け持ち事例
D	高齢・寝たきり	女性	有・娘2人	看護師が先週より皮膚の状態が良くなっていると介護者に伝えている	受け持ち事例
E	高齢・寝たきり	女性	有・夫	介護者がケア中に手を握って介助している	受け持ち事例
F	A L S	女性	有・夫	看護師が療養者と家族の両方の体調を気遣っている	受け持ち事例
G	高齢・糖尿病	女性	有・夫	療養者が足の症状について看護師に相談している	受け持ち事例
H	認知症・自力排便困難	男性	有・妻	看護師が排便を行っている	受け持ち事例

##### 3. 学生の学びの内容(表3)

コードは25個、サブカテゴリーは9個、カテゴリーは3個に分類できた。なおコードは内容が類似、重複しているものは整理した。

以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >で表現する。

カテゴリーは【様々な療養者・家族に気づく】、【見ることで今まで感じなかった疑問を抱く】、【看護師の技術・関わりを通して学ぶ】であった。学生の気づき・疑問・学びのカテゴリー、サブカテゴリー、コードを表3に示す。

###### 1) 【様々な療養者・家族に気づく】

学生は実習を通して、<介護者の心情に思いを寄せ、感じる>こと、<他の家族とは異なる家族介護の様子を感じる>ことが得られた。さらに<療養者と家族の両方を見ていかなければならない

と学ぶ>と分かった。

###### 2) 【見ることで今まで感じなかった疑問を抱く】

病棟ではなく、家庭に訪問して療養者と家族の関わりも見の中で、<療養者と家族の関係の中で疑問や思いを抱く>こと、生活の場の中で実際に行われるケアをみて、そのことがどうして行われているか最初は分からず、<在宅における看護技術について疑問を抱く>ことが得られた。

###### 3) 【看護師の技術・関わりを通して学ぶ】

療養者や介護者の観察とさらに看護師の関わりを観察していく中で、<在宅介護の維持・向上には看護師のサポートが必要と学ぶ>、医療の説明やいきなり発生した問題に対して<看護師の関わりと療養者・家族の様子を見て学ぶ>、また在宅看護で行われる実際の看護技術をみる中で<必要な援助技術の根拠について納得する>が得られ

表 3 学生の学びの内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
様々な療養者・家族に気づく	介護者の心情に思いを寄せ、感じる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護者が手術になるという話を聞いて、私自身もすごいショックだった。</li> <li>・介護者は、自分のことよりも介護のことを心配をしていたので強いなあと感じた。</li> <li>・自分の時間も自分なりに作っていたし、愛情を持って面倒みている人もいるんだなあと感じた。</li> <li>・今ある状況に、自分なりの方法で、ケアが出来ていることに、前向きな気持ちや、すごいと感じた。</li> </ul>
	他の家族とは異なる家族介護の様子を感じる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(家族が疲労していて)それまでは訪問看護師がいくと、そばに付き添って見ている家族の方がほとんどだったので、ここはちょっと違うなと思った。</li> </ul>
	療養者と家族の両方をみていかなければならないと学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族は、療養者とまた違う視点で、両方を同時に見ていかななくてはならないと学んだ。</li> </ul>
見ることで今まで感じなかった疑問を抱く	療養者と家族の関係の中で疑問や思いを抱く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アセスメントした事例は反応がない方だったので、本当になぜ(介護を)続けていけるのかなって最初は思ったのが本音でした。</li> <li>・療養者と家族の意見が異なった場面で、看護師として、一人の人間として(何とかしなければいけなかったのではと)感じた。</li> <li>・学生は療養者の気持ちを受け止めるかわりが必要ではなかったかと疑問が残った。</li> </ul>
	在宅における看護技術について疑問を抱く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・吸引カテーテルが、学校では使い捨て無菌パックだが、在宅ではミルトンにつけてあり、消毒はしてあるけど無菌ではないと思って、それでも気管に入れて使うのは本当に良いのかなと感じた。</li> <li>・吸引カテーテルの管理の仕方療養者の体調に異変がないしと思う反面、在宅は経済面もあってそういう方法なのかと戸惑った。</li> <li>・排便をする時に嫌だと暴れる患者さんを見て、「どうして嫌だって思っているのに排便が必要なんだろう」って疑問に思った。</li> </ul>

看護師の技術・関わりを通して学ぶ	在宅介護の維持・向上には看護師のサポートが必要と学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師がフィードバックを家族に行うことでより介護力が向上して、笑顔が見られたため重要なことだと感じた。</li> <li>・家族が継続的に介護出来るように、家族に対してもケアを行っていかねばいけないと学んだ。</li> <li>・他の学生の訪問で老々介護で、愛情が見られたと聞いて、家族の中で愛情があるから続けていけるのか、やっぱり看護師さんが関わっているから続けていけると実感した。</li> <li>・実際に家族や療養者さんを見て、在宅看護では家族との関わりの方がむしろ大事なんじゃないかと思えるくらいだった。</li> </ul>
	看護師の関わりと療養者・家族の様子をみて学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いきなり発生した問題に対して、看護師は優先順位を教えたり的確なアドバイスをされていてすごいと思った。</li> <li>・常に患者さんの目線で説明していくことも、看護師の役割だと強く感じた。</li> <li>・新たな医療を説明する時は、療養者や家族がきちんと理解したかを確認することが大事だと学んだ。</li> </ul>
	在宅看護で必要な援助技術の根拠について納得する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口腔ケアで汚れが取れたり、吸引して食物残渣が引けるのを実際に見て、こういうことが大事なんだとわかった。</li> <li>・下剤だと、その後の処理を介護者が行うようになってしまったため、看護師がいる間に、摘便して排便を行う事が介護者にとって負担なく介護できる、という点で必要な援助なのだと学んだ。</li> <li>・在宅の吸引カテーテルの管理の仕方で、看護師に疑問も話せたし、助言も得られ、エビデンスが必要と指導をもらえたことで学べた。</li> <li>・教科書で覚えた細切れな知識が、間近で実体験できたことで、納得し、つながった。</li> </ul>
	在宅看護を行うには疾患の知識と見方が大切だと学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疾患についての勉強がたりず、療養者の何を見てケアを考えていけばいいのかが、わからなかったと実感した。</li> <li>・糖尿病を持っている療養者の何を見なければいけないのかということをカンファレンスの時に学んだ。</li> </ul>

た。さらにほぼ一人で訪問し、その時々での訪問で的確に判断、アセスメント能力が要求される看護師の姿を見て、〈在宅看護を行うには疾患の知識と見方が大切だと学ぶ〉が得られた。

## V. 考察

学生が実習を通して、着目する対象や看護の関わりの場面と学びについて考察した。

まず学生は【様々な療養者・家族に気づく】【見ることによって今まで感じなかった疑問を抱く】【看護師の技術・関わりを通して学ぶ】ことを基本に実習での学びを深めていることが分かった。

### 1. 【様々な療養者・家族に気づく】

学生は療養者、家族に着目している。他の科目ではほとんどが病棟実習のため、家族と関われる時間も限られるが、在宅へ訪問することで療養者だけでなく、家族をみる機会が多くなる。

学生は家族に着目し、「介護者の心情に思いを寄せ、感じる」こと、「他の家族とは異なる家族介護の様子」を感じている。また様々な状況で生活する複数の対象を訪問する中で「療養者と家族の両方を見ていかなければならない」と学んでいる。療養者と家族を見る中で、家族の存在がいかに重要で影響を及ぼすものか「気づく」のだと考えられる。

さらに「学びとなった訪問対象と場面」では学生全員が受け持ち事例をあげたことから情報収集し、アセスメント、看護計画立案をし、2度訪問することで対象と深く関わり、療養者や家族をみる視点が深められていく。また時間をおいて2度訪問することで療養者と家族の違った日常の側面や健康状態の変化を見ていくことにより、療養者と家族を見る視点がさらに深められていくと考えられる。

本学の在宅看護論実習ではアセスメントツールにロイの看護理論を基本とした記録用紙を用いている。さらに家族に視点を置いて『家族の状況』という項目を加えて使用している。また看護計画を3つ立案するよう指導しており、その中の1つは家族に対する支援を考えてくるよう指導している。入院中は患者のアセスメント・計画が主であったが、家族にも焦点を当てて、アセスメント、計画を立案、再訪問でさらに家族に関わる援助を一部実施していくことで「様々な療養者・家族に気づく」と考えられる。

以上から在宅看護論実習では、複数の療養者宅を訪問する実習と1事例の療養者を受け持ち、情報収

集し、アセスメント、看護計画立案する実習の両者を行うことの学習効果は高いと考えられる。

### 2. 【見ることによって今まで感じなかった疑問を抱く】

ほとんどの学生にとって、在宅看護の場面をみることは初めての経験となる。学生は様々な療養者や家族が生活する在宅看護の場を見ることで今まで感じなかった疑問を抱いていた。

学生は「療養者と家族の関係の中で疑問や思い」を抱いていた。反応のない療養者を介護している家族をみて、「なぜ（介護を）続けているのか」など疑問を抱き、短時間の訪問の中で考え、その場をさらに深く見ることで学びにつながっていくと思われる。さらに在宅での吸引カテーテルの管理方法や摘便について、「在宅における看護技術について疑問」を抱いていた。学内や病棟では1回1回使い捨ての無菌パックを使用していたものが、気管カニューレを消毒液につけてあるが、「ミルトンにつけてあり、消毒はしてあるけど無菌ではないと思って」や、摘便による排便コントロールについても「どうして嫌だと思っているのに摘便が必要なんだろう」と疑問に思っている。これらのことは、初めて在宅での吸引や摘便を経験する学生にとっては当然の思いであり、疑問から発生して、それを解決するための行動が生まれるきっかけになるとと思われる。

吸引カテーテルの手技については宮崎ら<sup>7)</sup>は（吸引）チューブ管理は、使い捨て、消毒（薬液/煮沸）などさまざまな方法がある。介護者の負担や経済性、安全性を考慮して選択していく必要があると述べている。学生も療養者の体調不良もみられず、また看護師からエビデンスを持った説明を受けることでその後、疑問は解消している。同様に摘便による排便コントロールに関してもその思いを教員に話すことで、指導を受け、療養生活を継続していくにあっての必要性について納得できている。

学生は在宅看護の場面を「見ることによって今まで感じなかった疑問を抱く」ことが分かった。その疑問は病棟との比較であったり、療養者と家族の関わりであった。そのことに対して、学生の感じた疑問を機会を逃さず、表現できるようにし、そこを基盤に納得し学びを深めていけるように、疑問を共有して関わるということが重要であると分かった。

### 3. 【看護師の技術・関わりを通して学ぶ】

学生は看護師の技術や関わりを通して学んでいる。

療養者と家族の関わりや看護師の関わりから「在宅介護の維持・向上には看護師のサポートが必要」と学び、ポジティブフィードバックの重要性や家族との関わり方の大事なことを学んでいる。このことは様々な療養者と家族を見るだけでなく、2度訪問することにより時間間隔をおいた療養者と家族の変化を見ることで、看護師の関わり方の重要性を実感することになると考える。そして「看護師の関わりと療養者・家族の様子」をみて学び、看護師が優先順位を教え、新たな医療を提供する時は理解したかを確認することの大切さを学んでいる。さらに口腔ケア、吸引の実際をみることで「在宅看護に必要な援助技術の根拠」について納得している。また摘便して排便コントロールを行うことが介護者に負担なく介護できるという点で必要な援助と学んでいる。また「在宅看護を行うには疾患の知識と見方が大切だ」と学び、疾患の勉強が足りないとケアを考えられないこと、カンファレンスで看護師に指導されることで、学びへの意識付けになったことが分かった。学生は「看護師の技術・関わりを通して学ぶ」こと、その前後で看護師と話をしたり、カンファレンスで場面を共有することで学びを深めていることが分かった。特に在宅看護論実習で同じステーションで同行訪問を繰り返していく中で、看護師が行う療養者と家族との具体的な信頼関係の築き方や関わり方、看護技術の提供の仕方を見ていく。そのことで、看護師と学生の距離が近くなり、疑問や質問を聞きやすくなると思われる。

その上で的確に行われる看護師の学生への関わりやカンファレンスでの助言は、学生にとってより受け入れやすく、理解しやすいものとなっていると考えられる。

以上から在宅看護論実習は、同行する看護師に学生の学びが大きく影響を受けると考えられる。そのため、教員が看護師と学生との関係で特に気をつけることとしては、同行する看護師と学生の最初の出会いがスムーズにいくように配慮したり、実習が深まっていく中で看護師と学生との関係が良好に保てるように調整や見守りをしていくことが大切である。

#### 4. 本学の実習目的・目標に照らし合わせての学び

目標の1)の地域で生活する療養者とその家族が持つ健康上の問題や課題と生活との関連を理解し、必要な支援を考えることができるについては、全員の学生が受け持ち事例を挙げたことで、2度訪問し、

アセスメント、計画立案をする中で目標達成に向けて、多くを学びとっていることが伺えた。療養者のみならず、家族へも視点を向け、関わりを考えて学びを深めていることが分かった。目標の2)の地域で生活する様々な健康の段階にある人々とその家族に対する看護の役割と特徴を理解するについては、療養者や「家族の心情に思いを寄せ感じたり」、訪問看護師の支援を目の前で見て「的確なアドバイスをしています」など対象の健康上の問題や看護の役割を、その場面を共有・共感しながら学びを深めていることが示唆された。学びを深めていく過程にはそのような共有・共感は重要だと考える。小森ら<sup>8)</sup>も看護学生は、在宅看護実習経験を通じ、訪問看護活動の場に感情移入することで、机上の学習による暗黙知から、身体・五感を駆使した共有・共感を獲得する。そして、言語化することによって概念化し、形式知となって創造されているのではないかと考えられたと述べている。目標の3)の健康上の問題や課題を持って生活する人々を支える社会資源や保健医療福祉の役割・機能を理解することについては、今回の研究は学生の着目する対象や看護の関わり方の場面に焦点を当てて行ったため、社会資源や多職種との連携については読み取れなかった。

以上から在宅看護論実習の目的・目標は、目標の1) 2)については、概ね目標は達成されたと思われる。在宅看護論実習の学生の学びは、【様々な療養者・家族に気づく】【見ることで今まで感じなかった疑問を抱く】【看護師の技術・関わりを通して学ぶ】のようにして深められていくことが示唆された。

本研究は、学生に時間を取って面接をしたからこそ聞き取れた内容、深く掘りさげて質問できたことも多かった。課題やレポートで文字化することと同時に学生の思いを言葉としても言語化することで学生の漠然としていた考えが明確になった。

## VI. 結語

本研究は半構成的面接の中から在宅看護論実習を行った学生が着目する対象や看護の関わり方の場面と学びを明らかにした。本研究を通して学生は、在宅看護という今まで見ることのなかった実習から【様々な療養者・家族に気づく】【見ることで今まで感じなかった疑問を抱く】【看護師の技術・関わりを通して学ぶ】ことで学びを深めていた。また概ね実習目的・目標が達成されたと思われる。在宅看護

論実習は病棟実習が主となる科目と異なり、看護師に同行し、看護師の関わりを見るのが中心となる実習である。今後もその特性を踏まえた教育の在り方について研究を行い、教育方法について考えていく必要があると感じる。

## Ⅶ. 本研究の限界

本研究は積極的に研究参加を申し出てくれた学生を対象としたものであることから、その学生の経験

や学びの内容に偏りがある可能性が考えられる。また研究データが3年前で時間が経過していることも踏まえ、今後研究が必要である。

## Ⅷ. 謝辞

本研究にあたり、快く面接に協力して下さった学生の皆様ならびに学生の学びを深めて下さった訪問看護ステーション及び療養者・ご家族の皆様から感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 平尾恭子, 山田和子, 熊谷幸恵他. 在宅看護実習における QOL を考慮した看護活動に関する学び. 和歌山県立医科大学保健看護部紀要. Vol.1, 2005, p.71-78.
- 2) 波止千恵, 原田広枝, 岡崎美智子. 在宅看護論実習の指導内容・方法の検討～実習方法の異なる2ヶ所の訪問看護ステーションでの学びの分析から～. 九州厚生年金看護専門学校紀要. no.1, 2000, p.45-50.
- 3) 渡邊厚子. 訪問看護ステーション実習で学生は何を学んだか～実習期間の拡大と実習評価を取り入れて～. 京都市立看護短期大学紀要. no.33, 2008, p.21-27.
- 4) 山本美弥, 御田村相模. 在宅看護実習における学習支援を考える～学生の実習体験の感想から～. 愛知さわかみ看護短期大学紀要. Vol.5, 2009, p.97-103.
- 5) 樋口キエ子, 臺有桂, 若佐柳子. 在宅看護実習における学び～訪問看護実習のまとめの記録分析から～. 順天堂医療短期大学紀要. Vol.14, 2003, p.85-94.
- 6) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 医学書院, 2012.
- 7) 宮崎歌代子, 鹿渡登史子. 在宅療養指導とナーシングケア—退院から在宅まで—4 在宅人工呼吸（気管切開開口／鼻マスク／在宅持続陽圧呼吸療法）, 2004, p.25.
- 8) 小森直美, 藤岡あゆみ, 小路ますみ. 看護学生の感動体験の考察と、その思考過程の検討—在宅看護実習後のレポートから—. 福岡県立大学看護学研究紀要. Vol.6, no.1, 2008, p.48-55.

## 参考文献

- 1) 佐伯胖. 「学び」の構造. 東洋館出版社. 1975.
- 2) 西崎未和, 菊地珠緒, 蓮井貴子. 在宅看護論実習における授業方法とその学習成果に関する文献研究. 川崎市立看護短期大学紀要. Vol.13, no.1, 2008, p.11-16.
- 3) 蓮井貴子, 菊地珠緒, 西崎未和. 対象理解を深めるための在宅看護論実習方法とその学習成果についての文献研究. 川崎市立看護短期大学紀要. Vol.13, no.1, 2008, p.17-20.
- 4) 木下由美子編. 新版 在宅看護論. 医歯薬出版. 2009.
- 5) 岡田悦子, 乗越千枝. 訪問看護ステーション実習における連携に関する学びの構造. 第41回地域看護. 2010.
- 6) 吾郷ゆかり, 祝原あゆみ, 栗谷とし子他. 在宅看護実習の学びの構成. 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要. 2011.
- 7) 小路ますみ, 小森直美, 笹尾松美. 在宅看護実習における学びの構成. 福岡県立大学看護学研究紀要. 2007.
- 8) 戸梶亜紀彦. 『感動』喚起のメカニズムについて. 認知科学. 2001
- 9) 戸梶亜紀彦. 『感動』体験の効果について—一人が変化するメカニズム—. 広島大学マネジメント研究. 2004.